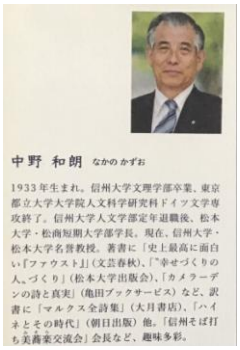
中野和朗先生と『やまなみの詩』

写真は８月刊行の中野和朗『やまなみの詩―上高地線ものがたり』かもがわ出版。表紙帯から―信州から満州、明治から今日までを舞台に 戦争と激動の時を越え、愛と不屈の精神が織りなす人間讃歌 そして今、若者たちの「武器よさらば」の歌声が響く　元特攻志願少年、米寿を迎える著者渾身の「遺言書」。

本書を読み、中野和朗先生のあつい思いが伝わってきた。信州松本の地で青春時代を過ごした頃が思い起こされる。中野先生は信州大学人文学部を定年退職された後、松本大学学長を務められた。2016 年に『至上最高に面白いファウスト』を出版され、すぐに読んだ。



先生は趣味多彩で、幅広く活躍されてきたことを、あらためて知った。先生の多彩な趣味が、本書にも「信州そば打ち」をはじめ、いろいろな形で反映されている。本書を読んで感じたのは、演劇や映画の「台本」のような展開だ。これも先生の「演劇人」としての思いなのだろうか。山田洋次監督ファンとしては、つい吉永小百合さんが晩年の「愛子」を演じる映画を期待したくなった。

本書、そして昨日レポートした『未来への航跡』は、いずれも京都のかもがわ出版による。なんだか 1971 年の信州松本を思い起こす。1971 年というと、今から 50 年、半世紀前のことだ。私は 1967 年に信州大学人文学部に入学した。岐阜県の郡上高校では国立大学に入学するのは数人であった。本当は金沢大学法文学部を目指したが、悲しくも不合格だった。それで当時、国立「2 期」だった信州大を受験して滑り込んだ。入試の日、体調を崩していたので、よく合格できたと今でも思っている。

信州大に入学後、今でいう「閉じこもり」下宿生活を送った。詳しくは別に書いたが、大学生活に馴染めなかった。下宿で本だけは手当たり次第に読んだ。そんな中、ドイツ語には興味があった。中野先生にも、ドイツ語の面白さを教えてもらった。哲学の渡辺義晴先生の「ドイツ語で資本論を読む会」に参加して、経済学や哲学への関心を高めた。信州大時代、お二人の先生には本当にお世話になった。

わが大学時代は「大学紛争」真っ盛りであった。じっとしておれず、下宿から飛び出し、大学民主化を求め自治会役員になった。私にとって大きな飛躍であった。大学紛争（私たちにとっては人文闘争）を終えて、さて進路をどうするか。渡辺先生と中野先生に相談して、大学院に進学しようと決意した。とりわけ中野先生のアドバイスにより、親に反対されたが大阪に向かい、宮本憲一先生にお世話になることに。そんな半世紀前を思い起こしながら、中野先生『やまなみの詩』を読みすすんだ。

（2021年８月５日）